

Expos
Vols' bondeoi
bloignu je font banu je

AST.

保健室の貴婦人

赤川 次郎



2uop222

22b tottoq tu2q oniam 2772 u222 11

bloignu

Expos

保健室の貴婦人

著者―赤川次郎

発行者―諸角 裕／発行所―㈱双葉社
〒一六二―八五四〇

東京都新宿区東五軒町三番二八号
電話・東京〇三―五二六一―四八一八(営業)
東京〇三―五二六一―四八三一(編集)
振替・〇〇―一八〇―六一二七二九九

印刷―大日本印刷株式会社
製本―株式会社宮本製本所

●落丁本・乱丁本は本社にておとりかえいたします。
●定価・発行日はカバーに表示してあります。

© Jiro Akagawa 1998 Printed in Japan

ISBN4-575-00648-3 C0293

bloignit je fontz bant je
Vlsts' bondeoi

Art

保健室の貴婦人

赤川 次郎



2uop392

2ab tottoq twaq oniam 2172 uuef ll

232slg m3m3t neu 123 10upue3
blo192

2019

648

ISBN4-575-00648-3

C0293 ¥781E

定価：本体781円＋税



保健室の貴婦人

赤川次郎

目次

1	新任教師……………	9
2	助手……………	16
3	魔法使いの弟子……………	22
4	指先……………	28
5	深夜の呼出し……………	35
6	和音……………	45
7	吉報……………	52
8	文化祭……………	61
9	灯は消えて……………	70
10	スキャンダル……………	80
11	代休……………	89
12	休日出勤……………	97
13	隠れ家……………	106
14	恐喝……………	114
15	毒……………	122
16	天文台……………	131
17	学校葬……………	139
18	墜落……………	147
19	男と女……………	155
20	忠告……………	166
21	不意打ち……………	172
22	物言わぬ女……………	178
23	業績……………	185
24	トップシークレット……………	191
25	弾丸……………	202
	エピソード……………	211

保健室の貴婦人

1 新任教師

立ち上った拍子に、椅子が大きな音をたてて、クラス中の子が振り向いた。別にどうでも良かった。そんな目で見られることには慣れている。

「――水上^{みなかみ}」

と、先生が教壇から言った。「何だ」

「頭が痛いんです」

「またか。この前は腹が痛かっただろう」

「今日は頭が痛いんです」

「そうか」

教師の田宮^{たみや}は皮肉っぽく、「次の時間はどこが痛

くなるのか、楽しみだな」

相手をする気分じゃなかった。――水上碧^{みどり}は何も聞こえなかったふりをして、

「保健室へ行ってもいいですか」

と言った。

教室の中に、いつもと違う笑いが広がった。――

何がおかしいの？ 碧はムツとした。

「お前、朝のホームルームの連絡を聞いてなかったんだな」

田宮は楽しそうだった。

「何ですか」

「保健室は今日から当分閉鎖だ」

「え……」

忍び笑いがそこから洩れる。

「先生が辞めた。それに伴って、しばらくの間、閉める」

田宮は得意顔で、「水上と違って、本当はどこも悪くないのに、どこが痛い、そこが苦しいと言って、サボる奴がいるからな。もちろん、お前は違うだろうけどな」

保健室を閉める……。

「どうする」

と、田宮は言った。「行っても入れないぞ、保健室には。この教室にいれば、一応出席したことにはなる。寝ててもいい。——どうする？」

今さら座る気にはなれなかった。

「——保健室へ行きます」

「入れないんだぞ」

「いいです」

田宮は肩をすくめて、

「好きにしろ」

と言った。

碧は机の間を抜け、後ろのドアから廊下へと出た。

教室の中で、みんなが笑うのが耳に届く。大方、田宮が何か言ったのだろう。

碧は、いささか野暮つたいセーラー服を着ている。この高校の制服だが、重くて肩がこる。

冷たい廊下は、午後の弱い日射しで白っぽく見えるが、少しも暖かさは感じられない。

——保健室は閉鎖。

もちろん、本当に具合の悪い子が出たら、何とかするのだろうが——。

ともかく、まだ授業は三十分以上残っている。廊下に突っ立っているわけにもいかない。

保健室へ行ってみよう。入れなければ、その時のことだ。

碧は歩き出した。

今ごろ田宮が碧のことを話の種にして笑っているかもしれない。そんなこと、ちっとも気にならなかった。

「馬鹿が馬鹿のことを『馬鹿だ』って笑つてりや世話ないや」

と、碧はひとり言を言った。「いやだ、いやだ！」廊下にその声が反響した。

足を止めると、碧は振り返って、思い切り大声で、

「いやだーっ！」

と怒鳴った。

ワーンと廊下の空気が鳴って、いくつかの教室のドアが次々に開くと、先生たちが顔を覗かせる。

声を上げて笑うと、碧はそのまま呆れ顔の先生たちを尻目に保健室へと歩いて行つた……。

〈当分の間、閉めます〉

愛想のない貼り紙一枚、保健室のドアに貼られている。

これだけ？——碧は、口を尖らして、ドアを開けようとしたが、むろん鍵がかかっている。

当然分つていたことではあるが、さて、それじゃどこへ行くのか。

帰っちゃおうかな、このまま。——でも、財布も定期も持っていない。

迷いながら、保健室の前に立っていると、

「何してるの？」

という声に、びっくりして振り向く。

スーツの明るい赤が、廊下の灰色の空間の中ではまぶしいほどに感じられる。

この人、誰？——碧の見たことがない、いや、たぶんこの高校に初めて来た人だろう。

こんな人が前に来ていれば、話題にならないはずがない。

「この生徒ね？」

と、その女性と言った。

齒切れのいい、よく通る声だった。

「うん」

と、碧が答えると、

「はい、と言いなさい」

「はあい」

「『はあい』じゃなくて、『はい』」

うるさいな、と思う間もなくたたみ込まれて、

「はい」

と、つい力をこめて答えてしまった。

「そう！ 自分でも気持ちいいでしょ。そう答えた方が」

と、その女性は言つて、「保健室に用？」

「あーはい。でも、閉ってるんで……」

「閉ってる？」

と、保健室のドアの貼り紙を見て、「『当分の間、閉めます』？ とんでもない！」

と言うなり、いきなりその貼紙を破つてしまったから、碧はびっくりした。

「校長室はどこ？」

と訊かれて、返事もできず、黙つて指さすと、

「案内して」

碧は黙つて歩き出した。

〈校長室〉の前まで来たとき、当の校長が、廊下をやって来た。

「――何だ？」

と、不機嫌な顔で二人を見る。

碧は、この校長の「機嫌のいい」顔を見たことがない。ともかくいつも、「うちの生徒は……」とプ

ツブツ言いながら、ここの校長になった身の不運を嘆いているのだった。

たぶん五十歳くらいで、碧の父とそう違わないと思うのだが、頭もすっかり薄くなって、えらく老け込んでいる。

「校長先生でいらつしやいますね」

と、その女性が進み出て、「私、保健室に今日から参りました、早乙女俊子と申します」

「保健室？ あそこは当分閉鎖することにしたんだ」

校長の浦田はにべもなく言う、「大体君はどうしてここへ来たんだ？」

「ここを辞めた前任者に頼まれたんです」

「勝手なことを」

と、顔をしかめて、「保健室は、授業をサボる子の温床になっている。だから閉めることにしたん

だ！」

そして校長室のドアを開けると、

「このN学園では君の仕事はない。帰たまえ」

と言つて中へ入ろうとした。

「待つて下さい」

と、早乙女俊子というその先生はドアを押えて、

「保健室を閉めるとおっしゃるんですか？」

「そう言つたらう」

「では、体育の時間などでけがする子が出たらどうするんです？ 急な発作や盲腸で苦しんでいるとき、どうしようとおっしゃるんですか」

「近所に医者もあるし、救急車も呼べる」

「保健室へ逃げてくる子も、心が疲れているんです。安心できる場所を奪つていいとは思えません」
聞いている碧の方がドキドキした。校長にこんなに正面切つて楯つくななんて、想像もできないことだ

った。

しかも、この早乙女俊子という先生、決してカッとなつて食つてかかつているのではない。口調も声のトーンも、冷静で落ちついてゐるのだ。

むしろ、浦田校長の方がカッカして、

「君に説教される覚えはない！ 大体何だね、勝手に押しかけて来て偉そうな口をきいて。さつさと帰りましたまゑ！」

と言ひ捨てて、中へ入り、ドアを閉めてしまう。

碧は、早乙女俊子の言葉にちよつと感動して——とても珍しいことだったが——いたが、これでおしまいだ、と思つた。

「分らず屋の校長先生ね」

と、早乙女俊子は言つた。「でも気の毒だね。あちこちで責められて、一人で苦勞をしい込んだと思つてゐる」

「そうですか」

「あなた、具合悪いんでしょう？」

急に訊かれてあわてたが、

「え……ちよつと……お腹が頭痛で……」

なんて、冗談みたいな返事をしてしまった。

「じゃ、待つてなさい」

と言うと、何とその「押しかけ教師」は校長室のドアを開けて、中へ入つて行つたのである。

碧は、目の前でドアが閉じると、中から校長の怒鳴り声が聞こえてくるだろうと耳を澄ました。——しかし、いくら耳を傾けても、怒鳴る声も喚く声も聞こえて来ない。

却つて不安になつて、

「どうしたんだろ」

と、廊下をウロウロしていると——。

五、六分のことだったろうが、ずいぶん長く感じ

られた。ドアが開いて、早乙女俊子が現われたのである。

「それでは、よろしくお願いいたします」

打って變つてにこやかに言う。

「ご苦勞様」

と、何と校長がドアの所まで出て来て、見たこともない穏やかな笑顔で、「では、保健室については、君に一任します。よろしく頼みますよ」

と言つたのである！

「かしこまりました」

早乙女俊子は、息をついて、「――さて、じゃ行きましょ」

と、碧に言うと、歩き出したが、

「――どうしたの？ ボーッとして。熱でもある？」